

涙にみがかれる魂

多摩に生きた画家

小島善太郎

第一章 貧しい生い立ち

第二章 書生時代

第三章 芸術の都、パリ

第四章 再び日本で



小島善太郎 八王子時代のアトリエ

はじめに

わたしはもう八十才を過ぎたおばあちゃんです。「あっこさん」ってよばれています。

これから、みなさんにわたしの父のことをお話しようと思います。父は小島善太郎という名の画家です。九十一才で亡くなるまで、仕事場の広いアトリエや山で絵筆を握って絵を描いていました。わたしは父が大好きで、亡くなるまで、ずっと一緒にくらしてきました。ですから、たくさんのお話を聞いて、いろいろなことを教わっています。少年時代、大変な苦

労をしたこと。とても貧しかったけれど周りの人に助けられ、フランスの
パリへ絵の勉強に行けたこと。

貧しさのなかで、父は運命の波にもまれ、やがては世の中に立派な画家
として認められていきます。そんな父のお話です。

第一章 貧しい生い立ち

子どものころの父は、まるで悲しいお話の主人公のようでした。

父は一八九二年、明治二十五年に東京の新宿で生まれます。父のお父さんの名は小島鎌太郎、お母さんは小島みの、といました。父は六番目の男の子として生まれたそうです。鎌太郎さんはわたしのおじいさん、みのさんはわたしのおばあさんということになりますね。おじいさんは、もととは農業をしていましたが、作物が実らない年が続いたため、農業をやめて、お店を開くことにしました。けれど商売をしたことのない素人のお店ですから、すぐ失敗し、土地や家もすべて失ってしまったと聞いています。そのあと、おじいさんは商売の勉強をして、もう一度お店を持ちましたが、悪い人にだまされて、また、お店がうまくいかなくなってしまうて

いました。おじいさんは悪いお酒を覚えてしまい、酔っては暴れておばあさんを悲しませていたそうです。おばあさんは苦労が続いたため、体が弱く、よく寝込んでいました。父のお姉さんが看病していましたが、そのお姉さんも体が弱く、十五才のころに亡くなってしまったそうです。

父は六男でしたが、一緒に育った兄弟姉妹についてわたしが知っているのは、お兄さんとお姉さん、弟、妹がそれぞれ一人いたことです。そのほかの子どものことはわかりません。父もよく知らなかったんじゃないかと思います。おじいさんの仕事は良いときもありましたが、その日の食事も困るくらいが続くこともありました。ほかの子たちは、幼いときに亡く

なっていたのかもしれない。そんな時代でもありました。

ヒーヤア フウ

ミーヤア ヨウ

イーヤア ムウ

ナーヤア ハウ

クーヤア トウ

塔から落ちたおいも屋さん

となりのおばさんちよつとおいで

いもの煮ころがしお茶あがれ

あとでおならはごめんだよ　プイプイプイ

はてな　はてな　はてはて　はてな

お父さんがよんでも　お母さんがよんでも

行きつこなあしいよ

ヒの　フの　ミの

父のお姉さんが小さいころ、近所の女の子たちと歌っていた手まり歌です。もつと長いのですけれど、父は大人になっても全部覚えていました。

お姉さんや、そのお友だちと仲良く一緒に遊んでいたので、男友だちからは、からかわれたみたいですね。でも父は負けずに向かっていったそうで

す。

父のお兄さんは九つも年上でしたが、ただただ遊んでばかりいて、苦しい家のくらしをもっと苦しくするばかりで、家にもほとんどいなかっただけです。お兄さんがあてにならないので、父は小学校をやめて、醤油屋

に丁稚奉公に出ることになりました。丁稚奉公というのは、知らない家に住み込んで働きながら商売の見習いをして、お盆とお正月にしか家族に会えないくらし



醤油屋の丁稚 小島善太郎 10代のスケッチ

をする子どものことです。しかも、そこのお店の主人は、人をだましてお金を儲ける悪い人でした。給料も出ません。そんな主人を父は嫌って、お店をやめさせてもらいたいと願いましたが、なかなか許してもらえませんでした。醤油屋をやめて、父がやっと家族のもとに帰れたときには、奉公に出してから五年近くたっていました。

父の醤油屋での主な仕事は、貧しい人たちに貸したお醤油の代金を集めることでした。昔、お金のない人たちは、お醤油を買わずに借りて、あとで使った分だけお金を払っていたのです。父がそこで覚えたものは、世の中の貧しさをつらさでした。けれど、大切な出会いもありました。父は、

きびしい仕事から逃げるために近くの墓地によく行っていましたが、ある日、真剣な表情で絵を描いている青年を見かけます。そのひたむきなすがたに感動し、自分もそのように絵を描きたいと願い、画家になる決心をしたそうです。そのために、真冬の神社に毎朝通って、冷たい水をかぶり、神様にお祈りもしました。

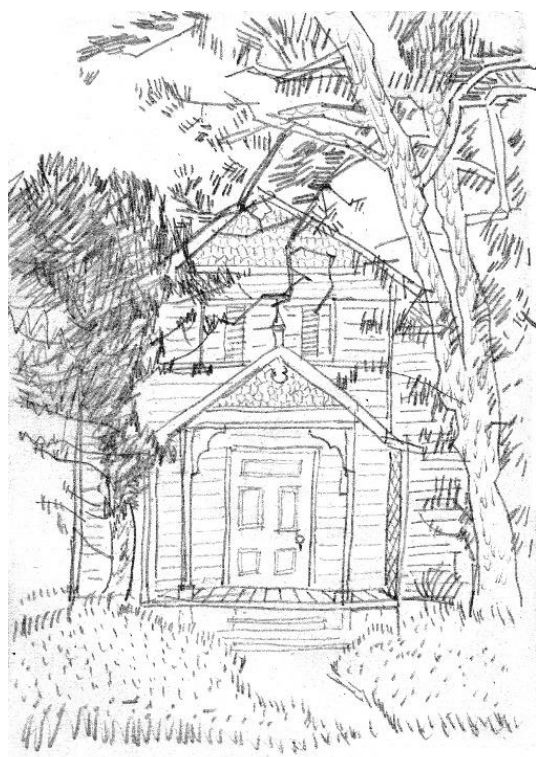
丁稚奉公から家に戻った父は、おじいさんのお店を手伝って働きます。そのころは、父のお兄さんも家にいて、いつになく働いていたそうです。両親と、兄、妹、弟、家族がそろって、ようやく落ち着いたくらしがはじまりましたが、それもつかの間のことでした。父のお兄さんがおじいさん

とけんかして家出をしてしまいます。そのうえ、おじいさんのお店にどろぼうが入ってしまったのです。商品がほとんど盗まれてしまいました。売るのがなければお店はどうしようもありません。店を閉めて、わずかばかりの品物を売り歩くほかありませんでした。そうするうちにおじいさんがけがをしてしまい、傷が悪くなって寝込むようになります。生涯で一度きりだった、親子そろった幸せなときは二か月も続かなかったそうです。一家はまた生活に困り、うすめた糊のようなおかゆを食べる毎日になりました。そんななかで父はようやく駅員の仕事を見つけましたが、体が弱いということ、一週間もせずにやめさせられてしまいます。父は、まだ小

さい妹を仕事に出すことには反対していたのですが、家族が飢えてしまうよりはと思い、ついに蕎麦屋に働きに出してしまいます。そして自分は八百屋で働いて、なんとかくらししていけるようにしたそうです。

きびしいくらしのなかでも、父は絵を描き続けていました。画家に

あこがれて安い絵の具を買い、醤油屋の主人にかくれ、一人で絵を描きはじめていたのです。醤油屋を早くやめたかった理由には、絵を描くことが許されなかったこともありま



洋風の家 小島善太郎 10代のスケッチ

した。絵が見つかりと破かれてしまうのです。家にもどって一番うれしかったことは、絵が描けることだったそうです。苦しい生活にあっても、むしろ、それだからこそ絵を描き続け、そこに救いを求めていたのです。そんな父に、人生の大きな変化がおとずれることになります。

第二章 書生時代

十七才の春のことです。父は働いていた八百屋の仕事で、立派なお屋敷

の中村家に注文を取りに行っていました。毎日のように通って家の人と顔見知りになっていましたから、ある日、その小学生の男の子に絵を描いてあげました。その絵が、あまりに上手だったので評判になり、中村家の主人の目にとまったのです。

一九一〇年、明治四十三年四月二日の夜でした。父はお屋敷によばれ、広間に通されると、主人に声をかけられます。

「吾輩として世話がいがあればじゃ」

本気で画家になる気持ちがあるのなら、書生として世話をしてくれると
いうのです。

書生という言葉はいまではあまり聞かれませんが、住み込みで家事の手伝いをしながら勉強をする者のことをいいます。明治から大正時代のころまでは、地方から都会に来た若者や、貧しいけれど優秀な若者には、そうして勉強をする者がいました。父はそういった若者たちと同じように、中村家の書生として絵の勉強ができるようになったのです。

書生としての生活は、仕事として朝のそうじと簡単なお使いを言いつかるだけで、残りの時間は



書生時代の小島善太郎

すべて絵を描くために使えました。仕事がそれだけでは申しわけないと、言われた以上に庭の草むしりをしていると、もっと勉強をなさいと、注意されたことさえあったそうです。中村家には十人ものお子さんがいたのですが、父が絵の学校に行くお金も出してもらい、夢と思っていた画家になる道を歩み始めることができました。父は涙が出るほど感謝しました。

しかし、本当の苦しみはこれからだったのです。父のもとに悪い知らせが入ります。蕎麦屋で働いていた父の妹が行方不明となってしまうのです。あちこち探しても見つかりませんでした。ある夏の夜、妹が事件に

あつて亡くなつてしまったことがわかります。

「兄さんに会いたい」

それが最後の言葉だったそうです。すっかり気落ちしたおばあさんは重い病にかかり、亡くなつてしまいます。やがて、おじいさんも寝込んでしまい、間もなく亡くなりました。まだ幼い父の弟は、親戚の家に引き取られたあと、足袋屋へ丁稚奉公に出ることになります。家族の不幸が続くなかでも、父は優しい中村家の心づかいを受けて、絵の学校に通い続けていました。さらには大きな展覧会にも入選します。しかし、その心は苦しみでいっぱいだったのです。学校でだれとも話をする気になれず、絵に打ち

込んで悲しみと戦っていたといひます。

「五才にして姉と死別し、六才にしてぼくと離れ、七才にしてまた姉と離れる。父は酒乱。ただ、か弱い母と日を送る。加えて家、貧。ますます

不運。転居、また転居。十才に長兄が家出。十

一才に姉と死別。十二才にして母と死別し、さ

らに父とも死別。そうして叔父に引取られ、そ

の年働きに出る。頼るに父亡く、母亡く、家も

無し。ただ、貧しきこの兄あるのみ。ああ。」

これは、幼い弟を思つて書いた当時の父の日



少年の絵 小島善太郎 10代のスケッチ

記ですが、父が自分自身を悲しんだ言葉でもあったでしょう。

第三章 芸術の都、パリ

父が二十才を過ぎたころ、同じ年ごろの大学生と友だちになります。その生い立ち、少年時代の話に心を打たれた友だちから、文章にして発表することをすすめられて、父は自分の生まれ育ちについて書き始めました。大学生や先生たちの間に、この話が広まり、多くの人が父の少年時代のこ

とを知るようになります。これをきっかけに、父はフランスのパリへ留学
することができるようになりました。父の話に感動していた大学生が、医
学の勉強をするためにヨーロッパの学校に行くので、一緒に行こうと誘っ
てくれたのです。パリで生活するお金は、その大学生が出してあげようと
いうことでした。ただ、パリへ行くお金は用意しなければなりません。日
本からフランスまで船で一か月半もかかった時代です。たくさんのお金が
必要でした。困った父でしたが、幸運なことに、大きな会社が若い人を育
てるためにと、パリへ行くお金を出してくれることになったのです。

こうして二十代の終わりに、父はパリに行って絵の勉強ができることに

なりました。パリは世界中の人があこがれる芸術の都です。父はさぞうれしかったことでしょう。

「フランスの地だ。これだ、自分があこがれていた景色は」

一九二二年、大正十一年

十一月十四日、父はパリの地に立ちました。かつて、貧しいくらしのなかで画家を夢見ていた少年が、ついにここまで来たのです。



フランスに向かう船上での小島善太郎

そのころのパリは大きな戦争が終わり、新しい時代に向かって、たいへんにぎわっていました。世界中から人が集まり、日本からも多くの人が来て、絵を学ぶ人も大勢いました。父は夢中でパリの美術館や展覧会を見て回り、たくさんの仲間もできます。

多くの人と同じように、パリでの絵の勉強は、学校に通ってモデルを描くことから始めました。父が通ったのは、朝の九時から夜の十一時まで好きな時間に学ぶことができる自



小島善太郎画パリで描いた女性像下絵

由な学校です。そのなかで、あるフランス人の先生の言葉が父の心に残ります。日本人は器用で、はじめはうまく見えるが、ちゃんと勉強しないで気分で描くばかりなので、成長することができない、といったものです。その言葉を聞いた父は、自分はパリに油絵を学びに来たのだから、油絵の歴史を学ばなければならぬと、古典絵画を勉強するようになりました。三百年から四百年も昔の油絵をまねて写すことにしたのです。何百年も前の油絵を実際に見て描き写すことはとても勉強になりますし、なによりパリなどのヨーロッパの大都市でしかできないことだからです。

そして二年をかけて大きさが三メートルもある油絵を完成させます。昔

の名画をそっくりそのまま描き上げたのです。自分なりの絵を描くのは日本に帰ってからもできる。せっかくパリにいるのだから、ここでしか見ることのできない名画を思うままに勉強しよう。父の考えははっきりしていました。パリは、それまでの自分のやり方をすべて忘れて、ゼロからヨーロッパの絵画、油絵を学び直す場所だったのです。また、父にとって画家になること、そしてパリに行くことは、とても大きな意味を持っています。パリは、それまでの自分をぬりかえて、新しく生まれ変わる場所でもあったのです。

父はパリでたくさんの人と知り合い、画家仲間はもちろん、フランス人

とも仲良くなります。ハフェニックス会^ㇿという名の会を作って、日本人とフランス人が一緒に歌い、ダンスを踊って楽しい時間をすごすこともありました。フェニックスというのはヨーロッパの伝説にでてくる鳥のことで、中村家で礼儀を教わっていた父は親切で、みんなに好かれたようです。小柄でしたので、フランス人からはかわいらしく見えたこともあったの

でしょう。父はフェニックス、伝説の鳥の仮装をして、会の主役にもなりました。それまでは家族の不幸が続ぎ、とても遊ぶ気持ちになれなかった父



フェニックスに扮装する小島善太郎

です。日本では無意味な遊びに思えたのか、ダンスを嫌っていました。けれど、パリでは女の人たちと手に手を取ってダンスを踊りました。楽しげに踊るすがたは、日本での父を思えば信じられない変化です。

アー、コリヤコリヤこんにやくやツ

表の看板　ローソクや

おっかーおっかーどんどんやー

ペケペツポー　ペケペツポー

父がでたらめな踊りを一人で始めれば、みんなはいっそう盛り上がり、その場は大きな笑い声に包まれました。

父は二年半の勉強を終えて、一九二五年、大正十四年三月に日本に帰ります。日本人仲間はもちろん、多くのフランス人も見送りに集まって別れを悲しみました。こんなに大勢が見送りに来たのは見たことがない、といわれるほどだったそうです。

第四章 再び日本で

日本に帰ってから、父はめざましい活躍をみせます。パリで絵を勉強し

てきた仲間たち五人と新しい絵画グループをつくり、世間から注目を集めました。展覧会で絵を発表するだけでなく、論文を書き、講演会を開いて、画家を目指す人たちへ絵の指導も行いました。パリから帰った父は、だれからも認められる画家に、夢であつた画家になつていたのです。

五人で始めたグループは話題をよ



絵画グループ結成の5人 左から二人目が小島善太郎

び、人数も増えて大きな絵画の会に成長しました。しかし、始めた五人のうち、二人が病気で亡くなってしまいました。残った三人のうち、一人は会をやめてしまい、もう一人は、またパリに行って日本にいなかったため、残ったのは父だけになってしまいました。けれど、多くの苦労を経験してきた父にとっては、打ち勝てないことはありませんでした。父はほかの画家仲間たちと、もつと大きな新しい絵画の会を作ること成功したので、その会はいまでも続いています。

それから父は都会を離れ、東京ではありますが、当時はずいぶん田舎だった八王子に引っ越すことにしました。四十才のときです。絵を売るこ

とや有名になることを考えれば、都会にいたほうが得でしたが、都会のさわがしさが苦手だったのです。

「人の心を打つものは素朴な純情であり、正直であり、智慧と深さである」

父はこう言って、武蔵野の自然、多摩の風景にそれを求めたのでした。



小島善太郎 八王子の住まい 半土半農千人同心の家屋

父の絵はよくおとなしい画風だといわれます。テーマはふつうで、特別に目立った技術も見られません。そのわけは、父にとって絵を描くことができることそのものだったからだと思います。新しいアイデアや技術を見せつけて、人をおどろかせたり感心させたりするためのものではなかったのです。テーマはふつうであることが大切で、技術も目立ってはむしろじゃまです。

父が八王子に移ってから描いた風景画に《春の丘》という作品があります。テーマも題名もいたって平凡で、技術もやはり目立ったところはありません。

ある晴れた春の日に、一人畑を
耕す人がいます。そこではなにも
起こっていないかのようにです。け
れど、丘は緑に色づきはじめ、新た
な生命が生まれています。畑には
種がまかれ、夏が過ぎて秋が来れ
ば作物が実るでしょう。畑仕事は
楽ではありませんが、父はその苦
労を絵には描きません。田畑にし



小島善太郎 春の丘 1962年 キャンバスに油彩

ても、きびしい冬の風雪に耐えたうえで迎えた春です。苦労があることを知ったうえで、父はおだやかな絵を描きました。明日が今日のようにおとずれるとは限りませんが、いまこの目の前にあるおだやかな風景はたしかなものです。おだやかで平凡な日々が続いて行ってほしい。そんな父の思いが込められているようです。つらい人生を送ってきた父には、平凡な幸せが、どんなにかけがえのないものなのか、よくわかっていたのでしよう。

やわらかい土にこぼれた種は見事に育ち、

不毛の地に落ちたものは枯れてしまうのが、

草木のかなしさである。

人間のみは、逆境に育って、

苦難にきたえられ、涙にみがかれる魂がある。

ある有名な学者の方から、父がいただいた言葉です。父の一生を表すのに、これほど良い言葉はないと思います。子どものときに多くの涙を流したから、父には多くの実りがあったのです。

「絵が明るくなったといわれるが、意識なく明るくなってしまおう」

年をとった父はそう語っていました。梅、もも、さくらなどの花や果実の絵をたくさん描いて、一九八四年に九十一才で亡くなります。八王子で四十年を過ごし、最後は妻の故郷の日野に住みました。

いま、東京都の多摩には青梅市に父の名が付いた美術館があり、八王子市の美術館でも父の作品を見ることができます。日野市ではアトリエが小島善太郎記念館となって多くの人に来ていただけるようにもなりました。多摩に生きた父、善太郎にとって、このうえないことと深く感謝しています。



晩年の小島善太郎と恒子夫人

おわりに

みなさんにも、つらいとき、苦しいとき、悲しいときがあると思います。どんなときでも、いま生きていることを大切に、真面目に一所懸命でいてください。そして感謝する心を忘れず、いてください。「あつこさん」とみなさんとの約束です。すぐに良いことがなくつても、きっと報われるときがきます。

『涙にみがかれる魂』。本当に良い言葉だと思います。人は悲しみの涙さえも、それを力にして立派に生きていくことができます。つらさや苦

しさ、悲しみは、人の心を傷つけるだけでなく、その人を育てることもでき
るのです。わたしの父がそうでした。あんなにつらい少年時代を過ごし
た父でしたが、前を向き続けて、実りある人生を送ることができました。
わたしはいま幸せです。これも父が真面目に一所懸命に生きてきたから、多く
の人の助けがあったからです。感謝、感謝の毎日です。

みなさん、「あっこさん」との約束を忘れずにいてください。

このテキストは小島善太郎ご遺族の了解のもと、次女の小島敦子氏が語りかける内容で、八王子市夢美術館学芸員が執筆、
編纂しました。

『涙にみがかれる魂 多摩に生きた画家 小島善太郎』二〇一四年（公財）八王子市学園都市文化ふれあい財団発行
（挿図を一部変更して転載）